

腹にくくった☒一本の
槍☒

あいうえおあおあお

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

万国を抜けた麦わらの一味。

仲間助けられ自由になったサンジは何かを想う。

目次

ハジマリ	1
ゲンエイタイケン	7
ゲンエイチヨクメン	14
ゲンエイリカイ	18
ゲンジツ	21

ハジマリ

はじまり①

物思いにふけるとき、麦わらの一味の料理人であるサンジは煙草を吸う。

昼。四皇のナワバリを抜けた少し先を見てみると、深い霧の中でライオンの船首を持った船が海上で波に揺られているのがわかる。周囲には船の影はなく、当然人の影もない。唯一ある人影は、愛用の煙草を吸いながら、サニー号の甲板で壁にもたれかかって座っているその船の料理人。

部屋の明かりは消した。霧ははれそうもない。今この時、この空間にある光は、霧の隙間からのぞく微かな日の光と、目の先数センチの煙草の火の光のみ。

その煙草の光を目でかすかに追いながら、ゆつくりと肺の奥まで煙を通すと、サンジは自分がようやく四皇のもとから解放されたことが実感できた。風向きの変化で、吐いた煙が顔にかかるのすらどこか心地よい。

風切り音を無視して耳を澄ましてみると、野郎共のうるさい寝息とレディ達のかすかな寝息の音以外は何の音も聞こえてこない。それもそのはず、数時間までやってきたの

は四皇相手の決死の闘い。誰が勝ったか一大興行。誰も彼もが疲れていた。

だからナミさんがカカオ島で買ってくれていた食糧でめいめいっぱい振る舞った料理をあいづらが腹一杯食べた後はあつという間。半刻も経たないうちに皆は寝室で眠ってしまっていた。もつとも、ルフィは食堂で食べ続けながら寝ていたが。

皿洗いや後片付けが済み、力尽きたルフィを寝室まで持って行くと、軽く部屋を廻り灯りを消す。それが済むと休息と見張りがてら甲板に出た。これでようやく落ち着いて煙草が吸える。

そんな風に思ったことで気が抜けたのか、つい疲れから座ってしまう。甲板に来た理由は見張りのためでもあるというのに。しかし、立ち上がる気力は起きない。そのまま煙草を吸い始める。

朝に食事を始めたはずが、後片付けを始めるときにはいつの間にか昼を迎えている。全くこの船の料理人は大変だ。だが、サニー号でこんな平穩を過ごせるということがたまらなく嬉しい。もつとも、そんなことはこつぱずかしくてとてもあいづらには言えないが。

ただ、その平穩にも影はある。

一味の一員となり、サニー号を何度も助けてくれた海侠のジンベエ。

そんな彼やその仲間であるおれ達を助けるためにナワバリウミウシの無力化やしんがりを引き受けてくれたアラディン率いるタイヨウの海賊団の面々。

面子のためか報復のためかおれ達を援護したクソ親父にクソ兄弟。ジェルマと命を共にすることを選んだおれの姉レイジユ。

そして自身の命と引き替えにサニー号をペロスペローの手から解放して出航させたペドロ。

あいつらを残しておれはサニー号に戻った。

はじまり②

「それで君は何に後悔しているんだ？」

床から生えてきたのかと思った。

瞬きをすると、そこには老人がいた。口調は若いが、齢は80は過ぎてるだろう。背中は丸くシワも多い。白い髭は胸まで届いてるし、声はしやがれている。しかし、周囲には船の影はなく、当然人の影もない。そんな時に気配も出さず突然現れたその男が、ただ者ではないことは火を見るより明らか。当然警戒すべきであり、いつそ攻撃でもしかけるのが適当であつたのだろうが、なぜかその物腰穏やかな老人に敵対する気は起き

ず、サンジは質問に答えてしまっていた。

「別に。ただ、もう少しやりようがあったんじゃねエかと思うだけだ」
目を閉じて少し思い返す。

おれが城の崩壊の際にブリユレを奪い返していれば、当初の作戦通り楽に逃げられたんじやないか。

おれがダイフクを倒していれば、キャロットちゃんが無理をすることもなく敵の艦隊を無力化出来たんじやないか。

おれに速さがあれば、ジェルマの援護は必要なくあいつらが取り残されることもなかったんじやないのか。

おれがオーブンを倒していれば、タイヨウの海賊団の奴らやワダツミが苦しめられることもなかったんじやないか。

おれに。力が。あれば。

全てが変わったんじやないのか。

上から心配がする。座ったまま顔のみを上に向けて見上げると、そこには皺だらけの顔があった。いつのまに移動していたのか。サンジは手持無沙汰になっていた右手で、口から煙草を拾い上げ息を吹いて火を消す。その亡骸を中心の位置で折り、火が再燃する恐れが無くなるのを確認すると、そのままポケットにしまった。

だが、老人を見ると、そのことを気にする様子は一切ない。煙など意に介していなかったようだ。要らん配慮だったか。

「『おれに力があれば』か。それは傲慢というものだ。相手は海の支配者。君が多少善戦したところで、彼らはすぐに対処してくる。君もその片鱗は味わったろう」

確かにそうなのだ。そもそも自分たちが逃げられたのだって仲間たちの助けと城の崩壊やマムの食い煩いといった偶然があつたから。それは分かっている。

それでも後悔は残る

老人はなおも微笑んでいた。その微笑みは人を馬鹿にしたところは一切なく、ただ純粹に楽しんでゐるものだった。随分とのんきなものだと思う。四皇のナワバリの近くにたつた一人で、なおも笑っているその神経はいつたいどれほど厚いのか。うちの船長といひ勝負だ。そして老人は微笑みを抑え、しかして口元が吊り上がっているままで、愉快そうにサンジに話しかける。

「そこまで求めるなら力をくれてやろう。お前がどれほどの力を持てるかは分らんが、あつて困るものではなからうよ」

随分と都合のいい話だ。まるでおとぎ話。嘘つきノーランドやジェルマ66のよう
な。

だがその二つは実在しているし、なぜだか目の前にいる老人が嘘をついているように
は思えない。

続く老人の言葉は物騒ではあったが、それでも顔の笑みは消えていなかった。

「そうそう言い忘れていたが、力を得るにあたって試練の類が無いというわけではない。
力を得るためには、自身のトラウマと向き合う必要がある。自分の過去や弱みと対峙し
克服しなければならぬ。心が折れる者や死んでしまう者も少なくない。それでもや
るかね」

自分でも深く考えて決断をしたわけではないと思う。

けど、答えは決まっていた。

ゲンエイタイケン

ゲンエイタイケン①

瞬きをすると、そこは檻の中だった。

その檻の中には生活に必要なものだけでなく、テーブルや椅子や棚まで揃っていた。料理の本や道具まである。囚人に与える設備としては破格だろう。しかしそれが王族、いや親が子供の存在を隠すための場所と考えたらどうだ。親が子供を死んだものとするための場所と考えたらどうだ。

きっとその子供には恨みしかないのではないか。

事実、サンジの目の前にいる鉄兜を被った少年はとても幸せそうには見えなかった。

胸糞悪いとは思う。おれを檻に入れる時のクソ親父の顔を思い出すと反吐が出る。しかし、ただの幻覚だ。これのどこが試練なのか。当時のことは忘れたくても忘れられない。いまさらこんなもの見せられたところで、どうということはないというのに。

そうした考えを持ちながらも、その子供に目を離せないでいると、突如なぜだか引き込まれるような感覚に陥る。周りを見てみても特に変化はない。自分もその場を動い

ていない。だったら何が変わったのか。何が試練なのか。そう疑問に思っていると、妙な錯覚に陥る。

認識と感覚が喰い違う。行動と反応が喰い違う。まるで、キツネに化かされたよう。さつきまで自分の胸にあつたのはジェルマへの恨みと怒りだ。だが、今は虚無感に似た悲しみを感じている。苦しみながらも全てを諦めている。自分には父の愛も兄弟と同じ身体能力もないから。おれの心は真つ白だ。何も無い。

そこで気づく。今、おれの心は一つじゃない。おれは今、昔の自分と繋がっている。

憑依といった方が正確だろうか。当時のおれの感情が一方的に流れてくるだけで、おれの思いがあちらに伝わることはない。ただ、昔のおれの苦しみが自分に流れ込むだけだ。記憶自体は忘れたことがない。だが、あの頃の苦しみはこれほど酷いものだったか。

当時、レイジュがおれのことを助けてくれたこともあつたが、レイジュにも立場がある以上それも時折のことだった。そのことを責めるつもりはないし、責められるはずもない。だが、暗い檻の中を一人で過ごすのはたまらなく寂しいし、誰からも必要とされ

ないというのはたまらなく苦しい。

その辛さに、ただの無力な子供だったおれが耐えられたのはなぜか。

その時、急に記憶が流れ込んできた。目の前の幼少時のおれが思い出しているのだろうか。それは初めて母さんに弁当を作った日の思い出だった。

初めての弁当は酷いものだった。料理となんざとても言えやしない。ただ調味料で味付けした具材を、弁当箱につめただけのものだ。それだけなら、まだ食べ物とは言えたのかもしれないが、その後その弁当を途中で転んで落としたり、つぶしてしまったり、雨にもぬらしてしまった。これじゃとても食べたものじゃない。

だが、母さんは笑顔でその弁当を喰っていた。先に味見をした侍女のエポニーも驚いてたつけ。一方でおれは何も考えずただ母の笑顔に喜んでいた。また作って欲しいという母の言葉に喜んでいた。

檻の中に戻る。記憶を振り返って改めて確信する。

無力だったおれが檻の中で堪えられたのは、海に出ようと決心したのは、母親との思い出があつたからだ。ヴィンス・モーク・ソラがおれにコックという道を指し示してくれたからだ。おれは母さんの笑顔に救われていた。

そう確信した一瞬間、母の顔が見えた気がした。

瞬きをすると当然のように母の姿は消え、檻も鉄仮面の少年もいなくなっていた。

ゲンエイタイケン②

目を開けたとき、そこは海に囲まれた岩山だった。

その岩山には木の実もねエ。動物もいねエ。頼りの海には魚くらいはいるだろうが、岩は波にえぐられて、一度降りたら帰ってこれねエようなねえみ返しになっていやがる。つまりは食い物は一切手に入らない。絶望だ。

そういうわけで食料を切らした金髪の少年と片足を無くした一人の老人は空腹から疲弊していた。座つてもいられないのか、二人とも体が傾いて、片手を地面につけている。それでも、殆ど開かない目を開けているのは、ここを通る船を決して逃したくないからだろう。その疲弊具合からして、漂流から70日は過ぎているか。顔はやつれきつていた。

そしてまた、あの感覚がやって来る。一気に視界がぼやける。頭は回らないし、手足はいうことを聞かない。胃酸が逆流しきつているのか喉の違和感が酷い。そのくせ吐くものもないのに吐き気はするし、腹痛も頭痛は収まる心配がない。呼吸でも体力を使うという当たり前の事実を思い知らされる。

気を抜いたらこのまま意識が持っていかれそうだったが、必死に耐える。ここで意識を失つても現実に帰ってこれる保証はない。四皇のナワバリを抜けられたばかりだと

いうのに、こんな幻覚で死ぬのなんざまっぴらだ。

突如、頭に何か、人間の手のようなものが触った気がした。当然、驚いた。おれの側に誰かいるはずもないのだから。だが、すぐにさわられたのが、感覚を共有している子供のおれだということが分かった。触っているのはもちろんクソジジイだ。

そこで、当時の自分の方を見ると、空腹からクソジジイの方に倒れてしまっていたおれの髪を、ジジイが触っていた。

（おれの髪を触っているのはジジイか。そういえば、なんでおれはこいつと一緒にいたんだっけ。確か互いに反対側を見張っていたはずだったのに。）

どうやら当時のおれは記憶を混濁しているらしい。なぜ、自分がクソジジイに気を許しているかも忘れていたようだ。

（ああ、そうだ。思い出した。漂流から70日目のあの日。包丁を持ってこいつの所へ訪れたあの日だ。あの日からずっとおれはこいつの側にいた。）

そして、また記憶が流れ込んでくる。漂流から70日目。それはおれがクソジジイの食糧を奪いに来た日。クソジジイの夢を聞いた日。

包丁を人に向けたのは生涯二度目だ。一度目は客船からクソジジイを追い出そうとした時。二度目がクソジジイから食糧を奪おうとした時。空腹で判断は鈍っている

たとはいえ、包丁を持ったところで勝てない事なんざさすがに分かつていたと思う。一度目の時に思い切りやられたんだから。でも、おれは包丁を持っていった。

あの時はジジイを殺すつもりだったが、今思えば殺されるつもりだったただけだろう。死ねば空腹からも逃げられるから。だが、ジジイはおれを殺そうとせず、満杯の袋には宝しか入っておらず、ジジイは自分の足を喰って生き延びていた。

本当にバカなジジイだ。同じ夢を持っていたからと、たかがガキ一匹生かすためにだけエ代償払いやがったクソ野郎だ。

だが、おれはそんなジジイに何もかも教わった。恐竜の時代の流儀も、赫足と呼ばれた足技も、おれが追い求めていた料理の技術も。

檻の中にいた時と何も変わらず無力だったおれが一流コックになれたのは、麦わらの一味として海に出ようと決心したのは、あのジジイの教えがあつたからだ。あのジジイがおれを送り出してくれたからだ。おれはあの偏屈なジジイに救われていた。

そう確信した一瞬間、母の顔が見えたのと同じように、東の海にいるはずのジジイの顔が見えた気がした。

瞬きをすると当然のようにジジイの姿は消え、岩山も衰弱しきつた少年もいなくなつ

ていた。

ゲンエイチヨクメン

次は何だ。次はいつだ。子供の時のイチジ達からの暴行か、出て行くときのジャツジの発言か、バラテイエの奴らにおれのスーブを床に落とされた時か、ボン・クレーに言うようにあしらわれた時か、C P 9のカリファの泡による戦闘不能か、スリラーバークでのくまとの遭遇か、シャボンディ諸島での一味崩壊か、カマバツカ王国での追いかけてこか、それともあれか、いやあれか。

そんな風に身構えていたものだから、まぶたを開けて、サニー号の甲板が見えた時は少々あつげにとられた。

だが、すぐに異変に気づく。帆は風を受けていないし、風切音も聞こえてこない。それは船の停止を意味するが、碇が下ろされてもいないのに、こんな海の真ん中で何も起きず止まるはずがない。おれは壁にもたれかかって座っていたはずなのに、まぶたを開けたときからずつと立っている。それに現実では昼だったはずなのに、空を見ると星が煌めいている。

何もかもがおかしい。現実ではありえない。つまり、これはまだ幻覚の中だ。

その瞬間、星が目の前を流れた。強烈な光だ。とても前を見ることすら出来ない。だ

が、その瞬間に誰かが目の前に現れたということだけは分かった。気配からして二人だろうか。一人は歩いているのか、その足音はなぜか金属音のように響く。粗い呼吸音と衣擦れの音からして、もう一人は倒れているのか。

歩いている方は恐らく老人。倒れている方は雰囲気からして女性。一体女性はなににおびえているのか。

だんだんと光に目が慣れ、周囲の光景が理解できるようになると、そこにサンジはあり得ないはずのものを目にする。

クソジジイが死んだはずのおれの母親を蹴ろうとしていた。

いや、おれが見た時はすでに蹴っていたのだろう。母さんの顔には青色の痣が痛々しく残っていた。大した意味はなかりうに、かよわい左手でその青くなつた顔を遮り、もう片方のかよわい右手で辛うじて自分の体を支えている。怖いのだろう。歯は噛み合つておらず、足も震えている。一方のジジイは無表情。このような顔をしているクソジジイを見るのは両手で数えるほどしかない。

一体何が起きているのか。今、自分が見ているものはなんなのか。

幻覚だと分かっていたはずなのに。幻覚だと気づいていたはずなのに。あり得ない

光景に思考が歪む。あり得ない光景に理解が拒む。あり得ない光景に血が沸き立つ。自分がどうすればいいか分からない。

必死になって自分の心を落ち着けようとする。先ほどまでのように昔の自分の意識を共有もしていないというのに、先ほど以上に心と体の不一致を感じてしまっている。だが、それもほんの一時のことだった。すぐに、また何も考えられなくなった。

母さんがこつちを見ていた。

偶然でもなければ勘違いでもない、間違はなくこちらを見ていた。驚いたかのように一瞬目が見開いた後、すぐにその目は当時の柔和な色を取り戻す。おれを無感情のマシーンにしないために、自ら血統因子に影響を与えるほどの劇薬を飲んだ母さん。何も知らずただ愛を求めていたおれや薬の後遺症でみるみる衰弱していく自分の体に、恨みや後悔があつてもいいだろうに、母さんの目は昔も今も変わらず優しくかった。

私の事なんて気にしないでいい、わたしは充分あなたが人間として生きてくれたことに救われたから。口に出してなどいないのに、そう思っているのが伝わってきた。お茶会でのレイジュの目もそんなことを言っていたように思える。本当に二人はよく似ている。

そんな目をされたら、こちらがやることなど決まっている。

後ろ足を踏み込み、前足は浮かせる。片手を地面に置き、後ろ足で全力で地面を蹴る。サンジは回転した。その技の名前は粗碎（コンカツセ）。

回転の勢いはどんどん増し、手を離し、再び地面を蹴る。足の先が黒くなる。どういふ手加減も無しに、ゼフの方へと進む。

ゼフの足はそのとき、ソラの顔の目の前にあつた。あと一秒遅ければ、そのままソラは吹っ飛んでいたろう。海へ落ちたかも知れない。だが、ゼフの足はソラに当たることなく、吹っ飛ばされたのはソラではなくゼフの方で、海に落ちたのもゼフの方だった。海へ落ちるとゼフの幻は消え去った。

だが、サンジはゼフの方を見てはいなかった。サンジはその時なにもかも忘れて、転がるように母の元へ近づき、その青くなつた顔を抱いて、たつた一言。

「お母さん」

母さんは笑っていた。笑つたまま泡のようになって消えていった。

ゲンエイリカイ

「試練は超えられなかったな、いいのか恩師を蹴り飛ばして」

上を見上げると、舵輪の側にあの老人がいた。少しずつこちらに近づいて来る。あの微笑を残したまま。

「おれが男の道を踏み外した時はおれの金玉かつ切って自分も首を切るって言ったのがあのクソジジイだ。」

「相手がそのクソジジイの幻だろうがなんだろうが、ここで動かなきゃいまもあのクソレストランで誰それ構わず飯を作ってるであろうそのジジイに蹴られちまう。あの人に顔向けできねエ様な生き方をおれはしねえ」

老人は目の前まで近づいていた。なおも微笑は崩さない。

「それが君の弱さだ。母親から受け継いだ人の心、恩師から受け継いだその信念。今回、君が手を出さなければそれを捨てられた。そうすれば、もつと楽に生きられたろうに。」

楽な生き方なんざクソくらえだ。

「全身に何百の武器を仕込んでも腹にくくった『一本の槍』にや敵わねエこともあ

る。感情を捨てて、ヴィンヌモークのバカどもと同じになるのなんざまっぴらだ。」

「おれはおれのやりたいように生きる。おれはおれのまま強くなって仲間尽くす。おれはおれを捨てねエし「ジェルマ」にだつて成り下がらねエ!!!」

それにうちの船長曰く、

「メシ炊きに従事して仲間料理を振る舞つたり、つまらぬ情に流され弱者の為に命を危険にさらすような脆弱な精神がおれのいとこらしいからな」

そのサンジの答えには今までにない晴れ晴れとした調子がこもつてた。

老人は笑つた。心底楽しんで笑つた。

その言葉を忘れるなよ。おまえは試練を超えられなかつたが、試練を得て自分を知ることが出来た。それも、また一つの答えだ。もう二度と会うことはないだろう」

そのままふわりと見張り台まで飛び、もう一度飛ぶかのように見えた時に、再度こちらに振り返ると

「そうそう君の船長はこうも言うぞ。科学の力は立派な“人の力”だと。腹にくくつた“一本の槍”を捨てないでいられるのなら、それに頼るのも悪くない。目が覚めたら

船長のポケットをあさってみる

そう愉快そうに付け加えた。

た。その言葉に疑問を感じる暇もなく、老人が空に消えたその瞬間サンジの意識も途絶えた。

????????????

?????

ゲンジツ

目が覚める。霧は晴れていて太陽が眩しい。

のつくりと立ち上がり周囲を見渡しても、老人は当然見当たらず、いた痕跡もない。

全部夢だったんだろうと思う。おそらく、自分が疲れから座ってしまった時にそのまま眠って、そこで夢を見たんだろうと思う。あの老人とのやりとりは、自分を納得させるために夢の中で言い訳をしてただけなんだろうと思う。きつとチョッパに夢の内容を話してもそう診断されるはずだ。だが、まあそれでもいい。多少なりとも気は晴れた。

太陽の光を浴びながら、体を伸ばす。大分寝ていたようだ。そういえば、練る前に煙草を吸っていたはずだと思い、床を見渡すも煙草は無い。風で海に落ちたか、それとも吸っていたのも夢だったのか。まあ、どちらでもいい。

遅い昼飯の下準備でもしようかと思いきッチンに戻ろうとすると、ふとズボンのポケットに何か違和感を感じる。

ザンジは立ち止まってポケットに入ったものを取り出し、それを数秒見て海に捨て

